

來てゐる。神聖國家への教團の進撃は始まつてゐる。もろくの佛教々團、あり來たりの教權等、自らの小さなはからひを捨て、神聖國家の大權の下に一元化せよ。國民の主師親としての天皇神聖觀念に對する民衆の社會的行動態の矛盾を指摘指導する事が佛教々團の「行道」でなければならぬ。全國民の共存共榮は、自然神聖なる人格的統制による無限的價値創造の現實社會的生活機能の組織體系の中に在る時、己心の神佛を國體的關係から分離した時、其處に何の「己心の神佛」があり得よう吾々の行道の根本行規は、本有本覺の神佛の内に吾人の生命を確認するに在る。人間の中から神佛を見出さんとする傾向が、往々錯覺的誤謬を犯し易いのは、此の宗教の第一義の自覺に我顛倒を起し、返つて自我の煩惱を主張する結果となるからである。教理と實踐内の本覺始覺の立前をよく分別しなければならぬ。而して吾々の行道は、國體理想なる八紘一字へめざす社

學窓を出で、祖廟に參籠し「本化門下」の使命を思ふ

小 林 學 山

會的生活の進化創造的關係に於て、國民神の顯現されたるものとして天皇神聖を認識し、日本國家成佛運動を翼賛するのである。互具圓融萬法本有事常住の法界を再認識せよ。佛法王法、眞俗二諦と叫んでもそれが觀念主義では用を爲さない。新らしき歴史が涌出せんとし、新らしき秩序が建立せられんとしてゐる。宗教家よ、「互具の原理」を全身心を以て再吟味する必要がありはせぬか。我見貧著し、入於憶想妄見網中にあり、彼我相對峙する限り、到底民衆の信頼に答へ、權威ある教化指導を行ひ得ぬであらう。

宗教家よ。捨身報國、忠死の中に、心大歡喜の境地を見出して永遠の「いのち」に生きてゐる、前線將士の靈を裏切つてはならぬ。凝視せよ！現在の宗教家よ、斯くあれと祈る。是れが日本人として歴史的、社會的存在の絕對現實的行爲の自覺であり、又これより再出發するものであるから。

一、二千年前印度、支那古聖賢によつてなされたる「日本國へ向つての佛法東流」の豫言

學窓を出でて祖廟に參籠し「本化門下」の使命を思ふ

昭和六年十二月、母の愛によつて不治の病より救はれ、佛弟子となつて立正大師棲神の奥地、身延山に於て修學中、御妙判を拜するに及んで今日迄の私の宗教觀、國家觀は根底から覆さ

學窓を出でて祖廟に參籠し「本化門下」の使命を思ふ

一六二

れ、心の暗に一大燈明は點ぜられた。

忘れられず、卒業謝恩の爲祖廟參籠六十日中、翻きたる序品の肝文、御妙判曾谷殿許御書の一節、

私は曾つて感じたことのない驚愕と感激とを以つて之を拜讀したのであつた、何たる奇蹟、二千年前、印度に残されたる「佛法東流の豫言」。殊に法華經の如きは、サンスクリット語を以つて綴られたる原本が四種類も嚴存するのである、私は經文を拜して佛教が實に神國日本を旨指して流れ來れるを知るに及び喜びの涙、瀧の如く流るゝを禁じ得なかつた。

法華序品によるに、釋迦牟尼佛法華經を説き給はんとして無量義處三昧に入り給ふや「佛、眉間白毫相の光を放つて東方萬八千の世界を照し給ふ」そこで彌勒菩薩が不思議に思つて文殊菩薩に向つて「佛の東方に光明を放ち給ふのは何か深い因縁約東事であらう」と問ふたのである。即ち「何の因縁を以つて此の瑞、神通の相あり」「其の佛の國界莊嚴」（日本語で言へば其の神國の國界莊嚴となる）「皆金色の如し」（マルコポーロの東方見聞記の日本は黄金の國と言へるは精神界に黄金の光を放つべき神國日本なることを、誤つて物質的黃金國と傳へたるものか）「世尊何が故ぞ斯の光明を放ち給ふ」「何の饒益する所あつてか斯の光明を演べ下ふ」「此れ小縁に非じ」この彌勒の間に對して文殊菩薩が「これまさしく如來將に法華經を説いて東方の國に送らんとし給ふのであらう」と言ふのが法華經序品の説相である、何故に東方に送るのか、これ「後五百歲中全世界に廣

宣流布」して末法の闇を照す爲には必ず世界統一の使命を有する神國日本に送らざれば意味をなさなくなるであらう。

大集經には佛滅後五個の五百年を擧げて第一の五百年中は解脫堅固、第二の五百年中は禪定堅固、第三多聞堅固、第四塔寺堅固とあり、第五の五百年、即佛滅後二千年末法に入つて我法の中に於て鬪諍言訟、白法隱沒の時、眞の白法たる法華經の廣宣流布と言ふことになる、その時通一佛土とて世界は一つになるのであらう。而して妙法弘通の爲に四菩薩の出現が涌出品に記されてゐる。

次に、曾谷殿許御書を見るに「彌勒菩薩の瑜伽論に云く「東方に小國有り其の中に大乘の種姓のみ有り云々。肇公の法華經漢譯の記文に「大師須梨耶蘇摩、左の手に法華經を持し、右の手に鳩摩羅什の頂きを摩で、授與して云く「佛日西に入つて遺耀將に東に及ばんとす、此の經典東北に縁あり、汝慎んで傳弘せよ。」予此の記文を拜見して兩眼瀧の如く一身に悦を徧くす、天竺に於て東北に縁有りとは豈日本國に非ずや」とて、二千年前大師須梨耶蘇摩の豫言によりて、法華經が、廣宣流布の大目的の爲に、世界統一の使命を有する神國、日本目指して湖の如く流傳し來つたるものとの大英斷を下したのが實に我が立正大師であつたのだ。次に遊式の筆に云く、「始め西より傳ふ、猶ほ月の生ずるが如し、今復東より返るは猶ほ日の昇るが如し云々正像二千年には西より東に流る、暮月之西空より始が如し、末法五百年には東より西に入る、朝日の東天に出るに似たり。」と

述べ次に根本大師（傳教）の記に云く、「代を語れば末法の初、地を尋ねれば唐の東」とあり、

天台は「後の五百歳遠沾妙道」とのべ妙樂は「末の初、冥利不無」とのべてゐる。次に大楠公が後醍醐天皇の聖意を奉じて岩清水八幡に朝敵滅亡の祈請をこらしし時の法華經典書（大正六年七月國寶に指定せられて、湊川神社に嚴存）には「夫れ法華經は五時の肝心。三世の導師此の經を以つて出世の本懐となす、就中本朝一州圓機純熟、宗廟社稷、護持感應、正成恭しく朝憲を仰いで逆徒に敵對するの刻り、乃至、當社寶前に一品轉讀すべきの由立願、仍つて一部を新寫し所レ果衍念件の如し。

建武二年八月廿五日從五位橘朝臣正成敬白とあるが、こゝに「本朝一州圓機純熟」とはまさしく立正大師の「此の經東北に緣ありとは豈日本國に非ずや」に相當するのである。因に數百年前朝鮮の諳觀法師も「東流一代聖教」と言つてゐる。かくの如く二千年前より、多くの印度、支那、朝鮮、日本の學者が佛滅後二千年、佛敎が東に流れて、やがて通一佛士の曉世界統一なつて法華經が世界救済の大法として末法の暗を照すことを豫言してゐるのである。

印度より東方に「國界莊嚴、皆如金色」の國ありや、私は今日こそ斷呼たる信念を以つて叫ぶ「有り、神國日本これなり。君臣一体、八紘一字の大理想を有する日東帝國これなりと。」

私は二千年前印度人によつてなされたる「東方有國」通一佛土「惡世末法」「後五百歳（二千年の後）中廣宣流布」の豫言

學窓を出でて祖廟に參詣し「本化門下」の使命を思ふ

を拜讀して、たゞこれ神の聲なりと讚嘆するの外はなかつた。何たる奇蹟の書であらう、何たる奇蹟文獻であらう。

二、「久しく大忠を抱き」六百年間、慘憺たる幕府の迫害を忍びつゝ、王政復古の今日を待ち

望み來れる日蓮宗徒殉敎の歴史を思へ。

今日でこそ神力品の「通一佛土」の理想たる世界統一は、あながちに否定出來ない。而るに我が立正大師は六百五十年前、既に「世界とは日本なり」と斷定したのであつた。神の目から見れば、世界は一つであり、世界を震撼せしめたる大元蒙古も神の目から見れば大日本の中の小蒙古に過ぎない。小蒙古輩の來寇によつて、大日本が滅亡するものではない、世界の神々は世界救済の大使命の爲の故に、日本國を守り給ふのだ「諸天晝夜常爲法故、而衛護大日本國」何と言ふ力強い叫びであらう。

大上人は「我が日本國は一閻浮提の内、月代漢土にも勝れ、八萬の國にも超へたる國ぞかし。」とのべ「日本國の王となるべき人は天照大神の御魂の入り替はらせ給ふ王なり」となし、三上皇を遠島に流し奉りし北條氏の大逆を指摘しては「伊豆の國の民、謀叛人」と痛罵し、時宗に書を與へては「夫此國は神國也、神は非禮を稟け給はず」と直諫した。

飛ぶ鳥も射落す北條氏の前に身命を捨て、立正安國を説き、「久しく大忠を抱いて」「日蓮が身の爲に申すに非ず、神の爲、國の爲、君の爲、一切衆生の爲に言上せしむる所なり」とて國諫三度、大小の難數知れず、打たれても蹴られても最後迄言ひ

通した日蓮上人こそ、日本人中の眞の日本人、佛弟子中の眞の佛弟子であつたらう。王政復古の今日、天皇陛下より立正大師號の宣下を恭けなうしたる旨なる哉、「立正安國！」正しき法を立てずんば國は安らかならず、王政復古し、天皇親政の世とならざれば、國光は輝かない、飽く迄「日本は神國なり」との信念を持ち、「王法佛法に冥じ、佛法王法に合し乃至、勅宣並びに御教書を下して戒壇を建立すべきものか、時を待つべきのみ。」一闍浮提第一の本尊此の國に立つべし」との大理想を胸に秘めて、大聖人の御魂は身延に鎮まり給ふ。而して日蓮門下は、たゞ一途に王政復古の今日あるを豫期して六百年間、幕府のあらゆる迫害を耐へ忍んで來たのであつた。時を待つべきのみ！時は來た、お萬の方の日蓮魂の血を受けた水戸唱久寺の建立者、光圀公の大日本史編纂が導火線となり王政は遂に復古した。

明治の聖代に會ひ奉つて、憲法發布となり、その第二十七條によつて法華經弘通の自由は遂に許されて、我が宗門は六百年間の迫害を逃れ、暗黒時代を脱して旭日昇天を拜するが如く茲に光明の世界へと這入つたのであつた。總てこれ諸佛の護持感應であり、時の而らしむるものである。

去る大正十年には、長多くも、大正天皇より立正大師號の宣下を忝うし、昭和六年の秋、十月大師棲神の靈地、祖廟へ立正の勅額を拜戴するに至つたのである。蜘蛛出で、喜びを知ると言ふ。承久の亂に於ける開闢以來前代未聞の下剋上以來の三災七難は實に上行菩薩出現の先兆であつたらう。

立正勅額の拜戴を見ること、これまさしく「廣宣流布の大願も叫ぶべき」無邊に流布する大瑞兆に非ずして何であらう。

三、上行菩薩は出現し給へり、三百萬の信徒よ

棲神の靈地身延へ集れ。

天台の五時判によるに、一に華嚴、二に阿含、三に方等、四に般若、五に法華涅槃の時とある。

末法を救ふべき法華經の教理は、西方十萬億の佛土を過ぎたる極樂淨土の彌陀一佛に歸依して日本國內大小の神祇を捨てよ閉じよ抛すてよ、と言ふが如き、幼稚なものではない。大楠公の七生報國の如く、「我常に此の娑婆世界に在つて説法教化す、ぬ餘所の百千萬億の國に於て衆生を導利す、五百億塵點その昔より常に此に在つて法を説く」ものである。

提婆品を見るに、此の世界のみでなく、三千六千世界を見るに豆粒程の土地も衆生濟度の爲に菩薩行を修した所でない所はない、三千世界の宗教運動は本佛の支配し給ふ所である。

法藏菩薩の西方淨土に於ける十八願たる彌陀の大悲も、キリストの十字架の受難も、釋迦の妻子、國位を捨て、の六年苦行も、達磨、天台、弘法、傳教、法然、親鸞の大悲化慈も皆これ本佛の應現垂迹に非ざるはない。

氣候、風俗、習慣を異にし、時代を異にし東西、地域を異にするが故に、よろしきに隨つて最高の教義を説いたのが世界に於ける各宗教の開祖であつたのだ、けれどもこれ皆實には唯一絶体無作三身の本佛の應化身でないものはないのである。

故に無量義經には「衆生の性欲不同なるが故に種々に法を説く、種々に法を説くと雖も、これ如來の方便力による。四十餘年には未だ眞實を顯はさずとあり」法華經には「此の無量義處三昧より立つて」「正直に方便を捨て、但無上道を説く」とある、法華經が「無上道」であり「衆經の上の在り」「法華最第一」であり、宇宙の眞理であるならば當然それは「之を古今に通じて謬らず、是を中外に施して悖らざる」大道でなければならぬ。「王法佛法に冥じ佛法王法に合すべき原理は茲にある、さればこそ「照千東方」此經有緣東北」等と言へる如く、佛法東流は一大事の因縁であるのだ。かくて惡世末法時、二千年後に、通一佛土、廣宣流布の爲に、上行、無邊行、淨行、安立行等の四大菩薩出現の豫言が「涌出品になされ」てあるのである。

貞應元年二月十六日、釋尊御入滅の翌日、降誕したる日蓮上人、伊東の海中より光明を放ちし、立像釋尊を生涯の持佛とした日蓮上人、大小の受難によつて門下の疑惑を招き、檀越の大半を失ひ、龍口法難の後、佐渡に於て信徒の疑惑を解かんが爲に意を決して上行の再誕なることを開顯し、凡夫の日蓮は既に龍の口に於て首はねられ、今は上行菩薩の「魂魄の佐渡に留まりて」書き残すことを記されたのが開目鈔二卷である。そして上行菩薩の受難を豫言せる、法華經五の卷勸持品「加刀杖、惡口罵詈、遠離塔寺、數々見擯出」の明文を出し、「勸持品の二十行の偈は日蓮一人讀めり、杖の字に値ふ人はあるべし、刀の字に値たる人を聞かず、刀の難は日蓮は二度値ひぬ、杖の難には

既に小輔房に面を打たれしかども第五の卷を以つて打つ、打つ杖も第五の卷、打たるべしと言ふ經文も五の卷、不思議なる未來記の經文也、乃至、勸持品の二十行の偈は日蓮だにも此國に生れずば殆んど世尊は大妄語の人、日蓮より他の誰の人か法華經に付て惡口罵詈、刀杖を加へらるゝ者ある、今の世の僧等日蓮を譏奏して流罪せず、法華經の故に度々流されずば、經文虚し、數々の二字を如何がせん、末法の初の兆し、佛の金言に値ふ故に日蓮一人讀めり。」とて、經文の豫言色讀によつて上行の再誕なることを證明したる日蓮上人、去る承久三年の亂、順徳上皇を佐渡へ、後鳥羽上皇を隱岐へ土御門上皇を讃岐へ流し牽りし北條氏の大逆、二千年の皇統危ふからんとする、日本開闢以來前代未聞の下剋上に疑問を抱き「日蓮此の不審をはらさんとて佛門に」入られたる日蓮上人、佛法、王法の邪曲による「大元蒙古の襲來」を豫言し、時宗に書を與へて「正月十八日西戒大蒙古國の牒狀到來す、日蓮、先年勘へたる立正安國論、少しも違はず普合しぬ、日蓮は聖人の一分に當れり、國家の安危は政道の直否に在り」と大政奉還を強要したる日蓮上人、承久の亂の翌年に生れて大蒙古襲來の翌年に華りたる奇しき一代の生涯であつたのだ。諦觀錄に曰く「東流一代聖教」と、光は東方より！ 佛陀の金言遂に虚しからず、上行菩薩の再誕日蓮上人は東方の神國日本に出現し給ふた。力強い哉。歴史は轉廻する三國同盟、新秩序の建設、世界を擧げてコペルニクスの六行換期に入らんとす、此の時に中り日蓮門下の覺悟如何。

學窓を出でて祖廟に參籠し「本化門下」の使命を思ふ

立て！三百萬の信徒よ、一心一体、祖廟に馳せ參じて身延川の清流に塵穢を洗ひ清め、頭に高祖大師を戴きて、第二立正安國運動を起せ。

三百萬一心一体となつて國家諫議をなしたならば「勅宣並びに御教書を申し下して」「世界第一の本尊此の國に立つ」ことは眼前にあるのである、何となれば後五百歳廣宣流布の鍵は靈山會上に於て釋尊より、末法の大導師上行菩薩に授けられてあるからである。

思ひ起せ、七百年前！鎌倉の街頭、降る來る刀杖瓦石の雨の中に、唯一人、身命を賭し、敢然立つて立正安國運動を起し、あれだけの大事業をなし給ふた日蓮聖人のことを思へ。

今日三百萬の信徒が打つて一丸となつて祖廟に額づき、大聖人を奉じて第二立正安國運動を起したならば一身は不淨なりとも、戒徳は備はらずとも「如何でか祈りの叶はざるべき」である。若し宗門人の中に祖廟を忘れて自己の力によつて布教を成功せしめようとする者あらば私は言ふ「謬れり、退け」と、此の人は四菩薩出現の佛の金言に叛く者であり、例せば城者として城を破り「大上人の御意に叛する者である、かゝる人は速に法衣を脱して自決せよ。

異体同心事に示して曰く「殷の紂王は七十萬騎なれども同体異心なれば軍に敗けぬ、周の武王は八百人なれども異体同心なれば勝ちぬ、日蓮が人類は異体同心なれば人々少く候へども大事を成して一定法華經廣まりなんと覺え候。」

(完)

蜜を得るには

一六六

結城 一郎

「胡桃を食はんと欲せば、先づその殻を破らざるべからず」蜜を得んと欲せば、蜂の刺す事を忍ばざるべからず」。二つながら英國の諺ではあるが、此の諺の持つ意味は、我々に不勞所得は人間性の墮落なる事を喻してゐる。

胡桃が割れ、蜜が自然に流れて來るのを切株に腰懸て紫烟を吐きながら待つてゐる様な暢氣な事の許された時代があつたればこそ今日の此の複雑限りない世代の様相が現出したのではなからうか。餌をつけずに釣する太公望は昔の寓話で現代には微塵の價値も認められない。自轉車を倒れさせぬ爲には走らせねばならない。成功するには不斷の倦ざる努力が必要である、時が凡てを解決すると考へるのは大きな誤りである。花の咲くのは確かに時ではあるが、花が咲き實が結ぶには、その根幹がなければならぬ、その根幹も常に手入れをしなければ、折角時が來つても花實を結ぶ事が出來ない、時運に相應するには日頃から實力を養成して置かねばならぬ、勞せずして功ならず。蓋し適言と言ふべきである。最善の結果を希ふのは人情の常ではあるが、此に眞剣な努力が並行しなかつたならば、それは求め得べくして求められぬ、儼たる生活の規準である。依之思此我々に與へられた當面の問題は止暇斷眠晝夜常精進の聖訓を如實に行藏に移す事より外にはない。